

## 内在的北朝鮮研究における「朝鮮中央TV」の活用

日本大学 川口智彦

### 1. 北朝鮮官営メディアへのアクセス

#### (1) インターネット普及以前

北朝鮮研究における最大のネックは研究情報の少なさである。北朝鮮は、厳しい情報統制を行っており、同国から発信される情報が基本的には官営情報に限定されている。しかし、これは質に関する問題であり、量に関しては、資本主義国の民営メディアが発信する情報量よりも少ないとはいえ、絶対的には一定の水準は維持している。

長い間、最も容易に同国の官営メディアが発する情報を取得する方法として、「平壤放送」、「朝鮮中央放送」、「朝鮮の声放送」などの名称で発信されるラジオ放送を聴取するという方法が用いられた。「平壤放送」、「朝鮮中央放送」、「朝鮮の声放送」は日本語も含む外国語でも放送しており<sup>1</sup>、特別な受信設備を備えなくても、AM中波放送を受信するための小型ラジオで日没後は良好に受信することができた。また、短波を受信できるラジオがあれば、いずれかの周波数で終日受信することが可能であった。

この他にも、設備さえ整えれば「朝鮮中央通信」が発信する英文ラジオ・テレタイプ(RTTY)によるニュース報道を受信したり、朝鮮総連系の企業と講読契約を結ぶなどして『労働新聞』を講読したりすることも可能であったが、いずれも費用という側面からは容易ではなかった<sup>2</sup>。

このように、北朝鮮官営メディアが発信する情報は、長い間、放送媒体による音声(あるいはRTTYの文字)と紙媒体による文字(静止画像も含む)に限定されていた。

#### (2) インターネット普及以後

しかし、インターネットの普及に伴い、2010年頃から北朝鮮はインターネットによる情報配信を始めた。北朝鮮は、2009年6月頃からTwitterを通じて「朝鮮中央通信」報道の配信を始めた。開始当時は、北朝鮮による配信ではなく、北朝鮮外のTwitterユーザーがニュース・フィードをしているだけだと考えられたが<sup>3</sup>、その後、これが北朝鮮当局によるものであると確認された<sup>4</sup>。しばらくすると、北朝鮮は「祖国平和統一委員会」が運営する海外向け総合北朝鮮情報発信サイト「우리

<sup>1</sup> 外国語による放送は、全ての放送局が常に行っていたわけではなく、時期により異なる。北朝鮮のラジオ放送については、「アジア放送研究会」が詳しい。「アジア放送研究会」HP、<http://www.abiweb.jp/>、2014年8月14日確認。

<sup>2</sup> 現在、『労働新聞』の定期購読には年間で13万円近い費用がかかる。「オークラ情報サービス株式会社」HP、<http://www.e-okura.co.jp/>、2014年8月14日確認。

<sup>3</sup> HUFF POST MEDIA, KCNA, North Korean State Media, Available On Twitter, 2009.6.26, [http://www.huffingtonpost.com/2009/06/26/kcna-north-korean-state-m\\_n\\_221415.html](http://www.huffingtonpost.com/2009/06/26/kcna-north-korean-state-m_n_221415.html), 2014年8月14日確認。

<sup>4</sup> 北朝鮮当局がTwitterによる情報発信をしていると公式に認めたことはないが、「우리 민족끼리」(これについては後述)などとの連携からして、ほぼ確実に北朝鮮当局による運用と判断される。

민족끼리」(邦訳は「我々民族同士」、以下邦訳を使う)<sup>5</sup>を立ち上げたのに続き、「朝鮮中央通信」<sup>6</sup>や「労働新聞」<sup>7</sup>などのサイトを立ち上げた。これらのサイトが正確にいつ立ち上げられたのかは分からないが、概ね2010年から2011年にかけて順次立ち上げられたようである。

#### ①「朝鮮中央通信」と「労働新聞」

北朝鮮がインターネットで情報を発信するようになったことで、北朝鮮研究における北朝鮮官営情報取得環境は大きく変化した。まず、「朝鮮中央通信」のサイトが運用を開始したことで、同通信の報道が即時、朝鮮文で読めるようになり、記事によっては英文、中国語文、スペイン語文、日本語文などでも読めるようになった。この「即時性」があったため、2012年の「2.29米朝合意」や、2104年5月30日の「日朝政府間協議」の合意内容発表のタイミングを相当正確に確認することができた。そして、発表のタイミングから両国間の「合意」発表連携の緊密さや、それに対する北朝鮮側の姿勢を忖度することができた。

北朝鮮の官営報道は、同じ記事であれば、通常、一字一句同じである。その基礎となるのが『労働新聞』の記事である。「労働新聞」HPは毎日朝7～8時頃に更新され、webページ形式と紙バージョンの『労働新聞』をそのままpdf化したものを読むことができる<sup>8</sup>。『労働新聞』の主要な記事は「朝鮮中央通信」HPでも読むことができるが、全ての記事が転載されるわけではないので、「労働新聞」HPで貴重な情報を得られることもある。また、同HPには検索機能があるため、特定の事項に関する記事をリストアップすることもできる<sup>9</sup>。紙バージョンの『労働新聞』をpdf化したものは、新聞紙面での記事の取り扱い(掲載紙面や写真の大きさ)を確認するためなどに使うことができる。

「朝鮮中央通信」HPと「労働新聞」HPは、ドメインにkpが使われているので、北朝鮮国内に設置されたサーバーを使っての運用と思われる。

#### ②「我々民族同士」

一方、北朝鮮の「祖国平和統一委員会」により運営される「我々民族同士」HPはドメインにkpはなく、中国(瀋陽)に設置されたサーバーを使用している<sup>10</sup>。「我々民族同士」HP

---

<sup>5</sup> 「우리 민족끼리」HP、<http://www.uriminzokkiri.com/>、2014年8月14日確認。

<sup>6</sup> 「조선중앙통신」HP、<http://www.kcna.kp/kcna.user.home.retrieveHomeInfoList.kcmsf>、2014年8月14日確認。

<sup>7</sup> 「로동신문」HP、<http://www.rodong.rep.kp/ko/>、2014年8月14日確認。

<sup>8</sup> しかし、筆者は北朝鮮国内で流通する『労働新聞』と比較したことはない。

<sup>9</sup> 2013年12月の張成沢事件以前は、数年間遡って記事を検索することができたが、現在では同事件に伴う張成沢関連記事削除などの影響で2014年1月以降の記事しか参照できなくなってしまった。

<sup>10</sup> 「我々民族同士」のドメイン(uriminzokkiri.com)からIPを引くと、61.161.179.66となり、このIPを使うサーバーはUNICOM-LNというネットワークの瀋陽に設置されたサーバーであることが分かる。ただし、ドメインからの逆引きの精度は100%保証されるものではない。

は、北朝鮮官営メディアの総合サイトで、上述の北朝鮮官営サイトに掲載された記事の転載やリンクがある。さらに、上述以外の北朝鮮が運営するサイト、例えば「내나라」(邦訳、「私の国」、kpドメイン)<sup>11</sup>や北朝鮮の海外向け放送「조선의 소리」(邦訳、「朝鮮の声」、kpドメイン)<sup>12</sup>などへのリンクがある。

また、北朝鮮研究において非常に重宝するのが「朝鮮語大辞典」<sup>13</sup>である。北朝鮮の文献、特に「文学作品」には、北朝鮮独特の語彙がたくさん使われているが、日本や韓国で販売されている一般的な「(韓) 国語辞典」<sup>14</sup>には収録されていないケースが多い。韓国のweb辞書であるNAVER「国語辞典」や韓国・統一部のサイトにある「北韓用語辞典」<sup>15</sup>でもこれらの北朝鮮語彙の一部を調べることはできるが、限界がある。しかし、「朝鮮語大辞典」は北朝鮮が編纂した「国語辞典」なので、北朝鮮で用いられる語彙の意味を北朝鮮による解釈で正確に調べることができる。

「我々民族同士」はまた、多くの動画を提供している。これまで、北朝鮮が配信する動画を視聴することは、非常に困難であった。例えば、「朝鮮中央TV」を日本で本格的に視聴するためには、北朝鮮がタイの通信衛星Thaicom-5を中継して放送している電波を受信する以外になかった<sup>16</sup>。Thaicom-5からの電波は、日本でも受信チューナーと直径1.5m以上のパラボラアンテナがあれば受信可能であるが、これらの設備は高価である上、大型のアンテナを設置できる住環境が必要となり、都市部で確保することは難しい。しかし、「我々民族同士」が動画を提供するようになってからは、インターネットに接続されたPCさえあれば、北朝鮮の動画を容易に視聴できるようになった。

「我々民族同士」は、当初、動画を「我々民族同士」サイト内に組み込まれたプレーヤーで再生するか、動画ファイル(flv)をダウンロードして各自のPCにインストールされたプレーヤーで再生し視聴する形式を取っていた。しかし、「我々民族同士」のサーバー能力の限界のためか、時として再生やダウンロードが中断してしまった。しかし、最近では中国の動画サイトであるYOUKUやYouTubeで再生できるような仕様になっており、以前と比べて動画の視聴が容易になった。

「我々民族同士」は様々な動画を提供しているが、大別すると以下の3つに分けられる。

---

<sup>11</sup> 「내나라」、<http://www.naenara.com.kp/ko/>、2014年8月14日確認。

<sup>12</sup> 「조선의 소리」、<http://www.vok.rep.kp/CBC/>、2014年8月14日確認。

<sup>13</sup> 「조선말대사전」、[http://www.uriminzokkiri.com/php\\_tmp/dic/index.php](http://www.uriminzokkiri.com/php_tmp/dic/index.php)、2014年8月14日確認。

<sup>14</sup> 「NAVER 사전」、<http://dic.naver.com/>、2014年8月14日確認。

<sup>15</sup> 「북한용어사전」、<http://nkinfo.unikorea.go.kr/nkp/term/termDicaryList.do>、2014年8月14日確認。

<sup>16</sup> 北朝鮮は、少なくとも2007年からこの衛星を使って「朝鮮中央TV」を中継放送しているようである。NORTH KOREA TECH, KCTV moving on Thaicom-5, <http://www.northkoreatech.org/2010/10/19/kctv-moving-transponders-on-thaicom-5/>、2014年月14日確認。

第一は、「朝鮮中央TV」が前日に放送した一部の番組、第二は、「我々民族同士」が韓国メディアから転用した画像（動画・静止画）を使って制作した短い番組、第三は、「朝鮮芸術映画」などである。

いずれも、北朝鮮研究には有用な動画であるが、特に「朝鮮中央TV」は利用価値が高い。しかし、「我々民族同士」が配信するのは、前述したとおり、前日に放送した番組の一部であり、その選定は「我々民族同士」が定めた基準による。その基準設定自体が、北朝鮮が海外に積極的に公開したい動画である可能性もあるので、それらの特徴をきちんと検討してみる必要はあるが、著者は未だにこの作業を行っていない。

### ③日本と韓国のサーバーが中継する「朝鮮中央TV」

このように、「我々民族同士」が配信するのは「朝鮮中央TV」の一部の番組に限られている。しかし、日本と韓国に「朝鮮中央TV」を放送開始から放送終了まで全て中継しているサイトやサーバーがある。

韓国から「朝鮮中央TV」をウェブページ上でストリーミング中継しているのは、ソウル市瑞草区の「統一放送」である<sup>17</sup>。韓国では、Thaicom-5からのダウンリンク（地上で受信する周波数）に妨害電波をかけているため、上述したチューナーとパラボラアンテナを使つての受信は不可能である。しかし、「統一放送」はアップリンク（北朝鮮からThaicom-5への周波数）を受信することで妨害電波を回避しながらストリーミングを行っているとのことである<sup>18</sup>。

韓国からの「朝鮮中央TV」をWindows Media Player形式（MMS）でストリーミングしているサーバーもある。このサーバーも「統一放送」により運用されているともいわれているが<sup>19</sup>、その実態はよく知られていない。

これら韓国からのストリーミング配信は、韓国の「国家保安法」に抵触する恐れがある。韓国当局者は、「北朝鮮放送を大韓民国個人が視聴するのは自由であるが、これを再び送出する行為には国家保安法違法である余地がある」としつつも「サイトの利敵性の有無を検討したが、結論を留保し、動きを鋭意注視している」<sup>20</sup>としていた。しかし、2014年に入ってから、ストリーミング配信が不定期になっており、本稿を書いている時点では停止している。停止の原因は特定できないが、国家保安法違反で摘発された可能性もある。

日本からは「総連映画製作所」が運営する「エルファテレビ」<sup>21</sup>が「朝鮮中央 TV」のス

---

<sup>17</sup> SPTV、<http://www.sptv.co.kr/>、2014年8月14日確認。

<sup>18</sup> NORTH KOREA TECH, North Korean TV currently live streaming, <http://www.northkoreatech.org/2011/12/08/north-korean-tv-currently-live-streaming/>, 2014年8月14日確認。

<sup>19</sup> 同上

<sup>20</sup> donA.com、『東亜日報』「북한방송을 서울서 실시간 시청할 수 있다?」(2011.12.13)、<http://japanese.donga.com/srv/k2srv.php3?biid=2011121362798>、2014年8月14日確認。

<sup>21</sup> 「エルファテレビ」HP、<http://www.elufa-tv.net/>、2014年8月14日確認。

トリーミングを行っている。以前は、ストリーミングを行わずに一部の番組の録画を動画ファイルで配信していたが、現在は USTREAM を使ってストリーミング中継を行っている。「エルファテレビ」が「朝鮮中央 TV」を受信しているのかは未確認であるが、事実上、朝鮮総連が運営しているので、Thaicom-5 の電波（ダウンリンク）を受信してそれをストリーミング配信しているのではないと思われる。

「エルファテレビ」のストリーミング配信は、USTREAM という強力なストリーミングサーバーを使っている点では問題ないが、「朝鮮中央 TV」の放送開始時間からストリーミングを始めなかったり、放送終了前にストリーミングを中断してしまったりするという問題がある。

## 2. 「朝鮮中央 TV」の活用

### (1)他のメディアとの比較

本稿冒頭にも書いたとおり、北朝鮮研究の最大のネックは研究情報が少ない、あるいはアクセスが極めて困難なことである。しかし上述したとおり、北朝鮮がインターネットでの情報配信を始めたことにより、主要な官営メディアへのアクセスは非常に容易になった。

もちろん、北朝鮮情報は北朝鮮官営メディアが発信するものだけではない。韓国統一部のような韓国政府が発する情報、日米など諸外国政府が発表する情報、商業メディアが独自の取材を通じて発する情報など様々である。商業メディアが独自の取材で情報は、脱北者から得られたものが多いという特徴がある。

北朝鮮官営メディアが発する情報がプロパガンダであることは間違いない。しかし、脱北者から得られる情報も彼らが脱北をしたという経緯を勘案すれば、その信憑性が完全に保証されるとは言い難い。だから、プロパガンダだからという理由だけで官営メディアを一蹴してしまうことは適切とはいえない。特に、官営メディアを継続的に分析する、いわば「定点観測」は、北朝鮮研究においては非常に有効な手法であると考えられる。

これまでも、北朝鮮研究の先人たちが『労働新聞』報道を継続して緻密に分析することで、北朝鮮研究において高い成果を上げてきた。先人たちが『労働新聞』を分析・研究の対象としたのは、同新聞が朝鮮労働党の機関紙であるという点が最大の理由であるが、インターネット普及以前、ラジオ放送を除けば、ほぼ唯一アクセス可能なメディアであったという理由によるところも大きい。

ラジオ放送は音で情報を提供しているが、前述したとおり北朝鮮の官営報道はどのメディアでも一字一句同じであることが多いので、内容的には『労働新聞』の文字情報を読むのと同じである。しかし、ラジオ放送では新聞紙面で再現することが困難な音楽を聴取できる。北朝鮮では、「音楽政治」<sup>22</sup>という言葉が示すように、音楽は人民の娯楽の対象であると共

---

<sup>22</sup> 例えば、金正恩は 2014 年 5 月に開催された「第 9 回全国芸術人大会参加者に送った書簡」の中で「音楽芸術部門では（中略）党の音楽政治を先頭に立って支持していかなければなりません」と述べている。『労働新聞』、「경애하는 김정은동지께서 제 9 차

にプロパガンダの手段としても用いられており、北朝鮮音楽を分析することで北朝鮮社会の変化を論じる研究もある<sup>23</sup>。

## (2)活用の事例

「朝鮮中央 TV」では、文字、静止画、音に加えて動画を見ることが可能である。北朝鮮を「定点観測」することにおいて、「朝鮮中央 TV」を視聴することは、上記メディアにおける有用性に加えて、次のような有用性がある。それは、動画には文字、静止画、音に含まれていない間接的な情報が多く含まれているからである。

放送される動画は、事前に念入りな検閲を受けている。したがって、「20 時報道」という「朝鮮中央 TV」のメインニュース番組で使用される動画も、時として当局がテレビで放映するのに不適切だと考える部分にはぼかしが入っている。それにもかかわらず、動画の背景に写っている様子などから、貴重な情報を得られることがある。また、報道番組のように日々の北朝鮮の様子を映している動画を継続的に視聴していると、人々の様子や街の様子の変化を感じることができる。

指導者の動きが北朝鮮社会に与える影響も確認できる。例えば、2014 年 6 月上旬に金正恩が「気象水門局」を現地指導したときのことである<sup>24</sup>。この報道が『労働新聞』に掲載された翌日の 6 月 11 日からは、「朝鮮中央 TV」で放送される天気予報がより詳細になり、放送時間も長くなった。明らかに、金正恩の現地指導の結果である。

西側メディアでは無視されがちな、北朝鮮における技術発展などを確認することもできる。「朝鮮中央 TV」では、新技術などを紹介するドキュメンタリー番組をしばしば放送する。その一つとして、LED 照明を紹介するものがあるが、そこからは北朝鮮で LED 照明機具が生産されている実態、その企画上の性能などを知ることができる<sup>25</sup>。また、こうした番組を放送するということから、北朝鮮当局が節電のために LED 電球の普及促進に努めているという背景事情を推察することもできる。

音楽番組についていえば、演奏される曲目だけではなく、演奏者の服装などから北朝鮮の変化を推し量ることができる。金正恩時代に入って登場した「モランボン楽団」がその典型であるが、2012 年 7 月に行われた同楽団の公演の斬新さや演奏される曲目、さらにはステ

---

전국예술인대회 참가자들에게 역사적인 서한《시대와 혁명발전의 요구에 맞게

주체적문학예술의 새로운 전성기를 열어나가자》를

보내시었다」(2014.5.17)、[http://www.rodong.rep.kp/ko/index.php?strPageID=SF01\\_02\\_01&newsID=2014-05-17-0001&chAction=D](http://www.rodong.rep.kp/ko/index.php?strPageID=SF01_02_01&newsID=2014-05-17-0001&chAction=D)、2014 年 8 月 14 日確認。

<sup>23</sup> 例えば齊藤真、「北朝鮮『音楽政治』の潮流に関する研究—編曲、楽器編成に注目して—」、第 12 回現代韓国朝鮮学会研究大会報告、2011.11.20。

<sup>24</sup> 『労働新聞』、「경애하는 김정은동지께서 기상수문국을 현지지도하시었다」、(2014.6.10)、[http://www.rodong.rep.kp/ko/index.php?strPageID=SF01\\_02\\_01&newsID=2014-06-10-0002&chAction=S](http://www.rodong.rep.kp/ko/index.php?strPageID=SF01_02_01&newsID=2014-06-10-0002&chAction=S)、2014 年 8 月 14 日確認。

<sup>25</sup> 筆者は 8 月中旬に羅先市を訪問したが、そこでも LED 照明が相当に普及していることが確認された。

ージ上に登場したディズニーキャラクターたちが西側のメディアを驚かせた。しかしその後、張成沢事件などを経ながら同楽団の演奏者・歌手、彼女らのコスチュームや演奏スタイルに変化が現れた。これなども動画でなければ確認が非常に難しいことである。

「朝鮮芸術映画」（指導者の活動などを記録した「朝鮮記録映画」とは別に、一般的な映画はこう呼ばれている）や「テレビ連続劇」（テレビドラマシリーズ）では、我々には分からない北朝鮮の文化や社会生活の実態を垣間見ることができる。もちろん、これらの「映画」や「ドラマ」はきちんと検閲されており、北朝鮮当局が不適切と考えることは出てこない。それにもかかわらず、こうした「映画」や「ドラマ」を見てみると、一般にはよく知られていない現実が自然と表れていることがある。それは、出演者の台詞の中であつたり、使用されている大道具・小道具をとおしてであつたりということになるが、北朝鮮当局の検閲を経た動画の中でこうしたことが確認できるということは、北朝鮮研究においてとても参考になる。

最近の例では、7.27（朝鮮戦争「戦勝」記念日、「戦勝節」）前後に放送された「朝鮮芸術映画」『砲声なき戦区』を挙げることができる。これは、金正恩時代になって初めて制作された長編大型娯楽映画であるが、「朝鮮中央 TV」では初と思われるスコープサイズ（横縦比 2.35:1）で放送され、CG の多様など制作技術の進歩などが確認された。また、内容的にも米軍と旧日本軍の対比などで興味深い点があつた。確認こそできないが、こうした日本人の扱いが、進行中の日朝交渉と関係がある可能性も排除できない。

一方、最新のテレビ番組だけが北朝鮮研究に活用できるというわけではない。実態として、近年まで北朝鮮のテレビ放送を視聴することが極めて困難であつたということからして、過去に放送された番組の再放送を視聴できるという点は重要である。特に、上述した「朝鮮記録映画」において、金日成時代や金正日時代の様子を確認することは、当時と現代との視覚的な比較という点において非常に多くの示唆が与えられる。

### 3. むすびにかえて

以上、北朝鮮官営メディアへのアクセス状況の変化と「朝鮮中央 TV」の北朝鮮研究への活用について論じてきた。しかし、「内在的」という意味合いについて全く論じることはできなかった。

ここでは、学問的解釈における「内在的」はさておき、「内在的」を「朝鮮人民と同じ視点に自らを置くこと」と解釈してみたい。北朝鮮に長期滞在し、自由に調査研究することは現実的に極めて困難である。そのような状況において、朝鮮人民が日々視聴している「朝鮮中央 TV」を「定点観測」的に視聴することは、彼らと同じ視点に自らを置く一つの方法となり得るのではないだろうか。

2014年8月に筆者は北朝鮮の羅先市を訪問した。この時、筆者を案内してくれたガイドや交流することができた朝鮮人民と「話をする」きっかけとなり、彼らの外国人に対する警戒心を解いていったのは、私が朝鮮語を話せたことだけではなく、「朝鮮中央 TV」で放送さ

れた番組について、アップ・トゥー・デートな話ができただけからである。また、調査者という立場からいえば、これらの番組で見られた事象についての確認や、それについての彼らの考えを聞くことができ、北朝鮮の「今を知る」のに大変参考になった。

「朝鮮中央 TV」の視聴について、依然として筆者のネックとなっているのは、その中継を不確実な第三者に依存していることである。実は、筆者が訪朝する少し前には、本稿冒頭で書いたインターネットストリーミングが全てストップしてしまった。幸い、その後、名前を変えて再開しているが、なんとか大型アンテナを設置し、安定的に通信衛星からの電波を受信したいものである。